

フィジー諸島共和国における「エコ・ツーリズム」の考察

浅井 優一
立教大学大学院

ESDRC / Working Paper J-2

2009

ESDRC

WORKING PAPER
Series



Education for Sustainable Development Research Center
Rikkyo University

立教大学 ESD 研究センター (ESDRC) は、ESD が多様な社会活動の中で実質的に機能することを目標として、2007 年 3 月に設立されました。立教大学 ESD 研究センターは『「持続可能な開発のための教育 (ESD)」における実践研究と教育企画の開発』として、平成 19 年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定されています。

ESDRC ワーキングペーパーシリーズは、現在進行中の研究に対して、幅広くコメントを募ることを目的として、発表するものです。

© Education for Sustainable Development Research Center, Rikkyo University, 2008

立教大学 ESD 研究センター
〒171-8501 豊島区西池袋 3-34-1
ミッチェル館別棟 1 階
TEL&FAX : 03-3985-2686
Email: esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

目次

要旨	4
1. はじめに	5
2. フィジーにおける「観光」の変遷	5
2.1 1970年代	6
2.2 1980年代	6
2.3 1990年代以降	7
2.4 「ハニー・ポット」から「エコ・ツーリズム」へ	7
3. フィジーにおけるエコ・ツーリズム事例	8
3.1 アンバザ村の事例	9
3.2 ナブア川エコ・アドベンチャー、フィジー文化体験プログラム	13
3.3 ナララ村のエコ・ツーリズム実践	15
4. 考察	18
4.1 日常性（あるいは、演劇性）	18
4.2 「自然」	19
4.3 環境教育、ESD という視座	20
5. 終わりに	21

要旨

本稿は、フィジー諸島共和国において行われている「エコ・ツーリズム」を、「環境教育」ないし「ESD（Education for Sustainable Development; 持続可能な未来のための教育）」の観点から考察し、それらが有する「環境」、「伝統文化」への意識向上に繋がる教育的効果及び、「持続可能」な観光形態としての可能性について考察する。

第1、2節においては、1970年代以降、フィジーにおける基幹産業として台頭する観光産業の展開を概観する。具体的には、フィジーの観光産業が、国内の政治的対立や自然災害などの問題を経て発展してきた過程や、それに伴うフィジー政府の観光政策の変遷について明確にし、現在行われている「エコ・ツーリズム」が、「マス・ツーリズム」へのリアクションとして位置づけられてきた歴史的背景を確認する。第3節では、フィジーの村落において、実際に行われている「エコ・ツーリズム」事例を3つ紹介し、村落内部での運営の様子や、それぞれの事例が有する異なる特徴について記述する。第4節では、それら3つの事例を、「日常性（演劇性）」、「自然」、「環境教育」の視点から分析し、各々の特徴が持ちうる環境教育的効果、あるいは、問題点について考察する。更に、観光客に「環境」や「伝統文化」への意識を効果的に高めうる「エコ・ツーリズム」の在り方について検討する。

以上の考察に基づき、本稿は、環境教育ないしESDの面で「エコ・ツーリズム」が持ちうる最大の利点を、日常の生活に根差した個々別々の「文化」として「自然」を理解するよう促すことにある、と指摘する。そして、現在の「エコ・ツーリズム」が、「持続可能」な観光形態となりうる可能性、あるいは、そのための課題について論じ、「エコ・ツーリズム」の更なる発展の一助とする。

1. はじめに

生産主導型経済成長の行き詰まりが顕著となり、消費主導型へと資本主義経済が変容してゆく 70 年代以降、「観光」を中心とした「サービス産業」は、そうした転換を示す一要素として台頭し始めた。その後、環境問題の顕在化、それに対する問題意識が世界的に高まるにつれて、それまで主流となっていたフォーディズム型の観光形態である「マス・ツーリズム」（大衆・大量観光）の「環境」へ与える負荷が指摘されるに至り、新たな観光形態が模索されてきた。

「エコ・ツーリズム」は、そうした新たな観光形態の代表例である。とりわけ、「持続可能な開発」が叫ばれ始める 80 年代後半から 90 年代初頭以降は、「持続可能な観光」（「もう一つの観光」）の一形態として注目を浴びてきた¹。「エコ・ツーリズム」の台頭は、「住民参加型」（ボトムアップ型）を強調する環境・開発活動など、個々の社会文化的コンテクストの重要性を主張する活動の活発化と軌を一にし、世界各地で数多く実践されて来ている。

2. フィジーにおける「観光」の変遷

観光収入が、近代化の基幹産業であった砂糖産業を凌ぎ、今日における大きな経済的支柱となっているフィジーにおいて、新たな観光収入の手段として「エコ・ツーリズム」（生態・環境観光）への期待が高まっている。本稿では、「エコ・ツーリズム」を、「環境教育」ないし「ESD（Education for Sustainable Development; 持続可能な未来のための教育）」の側面を有するものとして捉える。言い換えれば、「見る」、「楽しむ」のみではなく、「学ぶ」という要素を含み、環境や「伝統文化」への意識を高めることが奨励されるツーリズム実践として定義する。そして、現在、フィジーにおいて実際に行われている活動事例を 3 つ紹介し、その現状、効果、問題点等について考察する。

本節では、その前段階として、フィジーにおける現在までの観光産業の変遷を理解するため、便宜的に 70、80、90 年代に分割し、主に、プランチ（2003）に依拠し、フィ

¹ 「持続可能な開発」は、1987 年の「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」において概念化され、以後 1992 年のリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国際会議（地球サミット）」や、2002 年のヨハネスブルク行われた「持続可能な開発に関する世界首脳会議」などを通して、広く認知されるようになった。

ジの観光、それに関する政策の軌跡を概観したい。

2.1 1970年代

フィジーは、1970年にイギリスから独立を果たす。しかしその後、フィジーは植民地時代の経済体制を受け継ぎ、砂糖産業・観光産業の2つを経済的柱として発展を遂げてゆくことになる。フィジー観光の特色は、「伝統的」なフィジーの文化を全面に押し出すサービス（後述、「ハニー・ポット」参照）にあり、1970年代から発表された開発計画以来、政府は、そうした観光産業開発を奨励してきた。その結果、フィジーにおける観光産業は発展し、観光関連の労働者数は2059人（1970年）から3180人（1975年）へと増加する（Varley, 1978）。経済的基盤が脆弱だったフィジー、そして、他のオセアニア諸国にとって、観光産業は〈将来の道〉であり、こうした70年代における展開は、主として海外からの投資に依存しつつ推進され、今日までのフィジー観光産業の基盤を形成したといえる。

2.2 1980年代

70年代における観光産業の発展も、80年代に入ると、自然災害、そして国内の政治的対立など、フィジーが今日なお直面している深刻な問題によって、紆余曲折を経ることになる。まず、1983年と85年に発生したサイクロンや、80年代後半のオーストラリアとニュージーランドの通貨の下落は、それまで両国から多くの観光客を受け入れていたフィジーの観光産業にダメージを与えた。更に、他の太平洋島嶼国や東南アジアも積極的に観光市場の開拓を進め、競争が激化したことによって、フィジーは大きな打撃を被った。このような状況に対処するため、フィジー政府は、オーストラリアやニュージーランドからの長期滞在型観光者に加えて、遠方からの複数の目的地を訪れる訪問者の誘致に力を注いでゆく。この対策によって、1980年から85年の間に入国者は増加したが、平均滞在日数は9.5日（1981年）から、約8.4日（1985年）へと縮小し、訪問者ごとの1日の平均支出は57.6フィジードル（1980年）から31フィジードル（1985年）へと、5年間で約46%も減少している。しかしながら、観光収入全体としては、1億900万フィジードルから1億6900万フィジードルへと着実な増加を示した（プランチ, 2003, p. 210）。

こうした努力によって、フィジーにおける観光者数と観光収益は、更なる増加が予想

されたが、1987年に起きたインド系政権に対するフィジー系によるクーデターで観光者数は激減し、フィジー経済全体が悪化する²。こうした政治的混乱を抱えるフィジーに対して批判的な海外メディアに対抗し、フィジー政府(航空・観光省)はフィジーの安全性を示し、外交関係の回復などに好印象を与えるための、「危機マーケティング」計画を実施する。その成果もあって、観光産業は、まもなく回復の兆しを見せ始める。その後、ヨーロッパや日本からの訪問者も着実に増え、1990年には27万8996人の訪問者を迎え、クーデター以後低迷していた観光収益も、1993年までに28万7462人にまで増加した (Ministry of Tourism, 2003)。

2.3 1990年代以降

このように、自然災害、そして、フィジー系とインド系との政治的対立は、フィジーの観光産業に大きな影を落としてきたといえるが、そのような危機にも拘わらず、観光産業はフィジーにとって、依然主要な収入源であり続けた。それを示すように、1998年から1999年の外貨収入の約75%は観光産業が占めている。(Islands Business, 1994)。また、訪問者数も、1990年には27万8996人であったが、2002年では39万7859人と、2000年にはクーデターで29万4070人と低迷したにも関わらず、着実に増加しているといえよう (Ministry of Tourism, 2003)³。

2002年現在、フィジーにおける観光産業は、4万人以上もの雇用を創出しており、GNPの16%を占めるに至っている。また、EUによる資金援助によって発表された2002年の観光開発計画は、2002年から2005年までに、訪問者数の5~6万人の増加、2万2000の新たな雇用、3億2500万フィジードルの外貨収入の増加を見込んだ(Walsh, 2006, p. 335)。

2.4 「ハニー・ポット」から「エコ・ツーリズム」へ

プランチ (2003) によれば、フィジー観光局は、政府の資金を受け、フィジー観光の市場拡大に取り組み、「ハニー・ポット」アプローチに拠って観光産業を推し進めてき

² 19世紀後半以降、フィジーは、主に砂糖産業の労働者としてインドからの移民を受け入れる。現在、フィジーにおけるインド系の人口は、全人口の約半分を占めており、同様に約半数の人口を占めるフィジー系との政治的対立が深刻な問題となっている(Siegel, 1987を参照)。

³ しかしながら、2005年5月のクーデターと11月の政治危機によって、再び大きく後退することになる。このように、フィジー国内の政治的対立は、フィジーの観光産業に直接的な影響を与える大きな問題となっていることが理解できる。

た。そして、このアプローチは、以下の通り、局地的に観光産業を集中することを意味し、過去 40 年間、以下の 3 点を切り札として採用してきた。

- ① 汚染されていない環境、美しく豊かな文化
- ② 友好的な人びと
- ③ 南太平洋の他の目的地へ向かうためのストップ・オーバーの地としての好条件

更に、1999 年に発表された観光開発の政府目標には、以下の 4 点が含まれた。

- ① 観光開発に合わせた統合的な自然環境保護（とりわけ海洋環境保護）
- ② 主な観光地の改善と強化、さらには全国に質の高い観光を広めるための基礎作り
- ③ 観光産業への投資意欲の改善
- ④ 政府や他の機関と共に発展をになうプライベート・セクターの推進

こうした流れの中で「エコ・ツーリズム」は、新たな観光形態の担い手として、大きな注目を浴びている。2004 年においては、22 のライセンスを取得しているエコ・ツーリズムのオペレーターが存在しているが、全体としては、依然として小規模なものに留まっているのが現状であるといえよう（Fiji: An Encyclopaedic Atlas, 2006, p. 353）。またフィジーは、観光産業を圧迫する問題⁴を常に抱えていることも事実であり、こうした問題点を考慮しつつ、どのようにして「持続可能な開発」を志向したエコ・ツーリズムを創出していくことができるのか、これが、これからのフィジーにおける観光産業の大きな課題となっている。

3. フィジーにおけるエコ・ツーリズム事例

前節では、70 年代以降のフィジーにおける観光産業、政策の動向について概観し、フィジーにおけるエコ・ツーリズムの重要性が、どのような経緯を経て見出されてきた

⁴ 観光産業を圧迫する問題として、政府は以下のように認識している。①高級市場向けの宿泊施設の不足、②高い建築費と公共料金、③投資承認手続きの遅延、④不安定な航空便と座席の確保、⑤主要な市場の景気後退、⑥海や他の自然資源の汚染と劣化、ゴミ公害、⑦投資の危険にみあう利益額の不明さ、⑧殆どの市場が期待する全体的な観光用インフラの欠如、⑨休暇用地が危険地帯にあるという認識の増加（Parliamentary Paper No. 20, 1999）

かを確認した。本節では、現在、フィジーにおいてどのような観光形態、エコ・ツーリズムが行われているのか、そして、それらに関連した課題について、それぞれ異なった特徴を持つ3つの事例（アンバザ村、ナブア川、ナララ村）を基に検討したい。性格が異なる3つの事例を比較・対照することによって、多種多様なエコ・ツーリズム実践の現状、それらの実践が持つ効果、課題を立体的に捉えることが可能となると考える。（なお、本稿で紹介する事例は、2008年3月から2009年1月にかけて、筆者がフィジーにおいて実際に参加したエコ・ツーリズム実践プログラムである。ここでは、実際の取り組みの様子を、「忠実に」再現するという目的から、実際の参加者として、あるいは、村落の生活者という立場から筆者が見た事例を、「エスノグラフィック」な記述によって描いた。）

3.1 アンバザ村の事例

ここに論じる、アンバザ村のエコ・ツーリズム事例は、筆者自身の観察に基づいた限定的な情報に依拠している。アンバザ村の事例の詳細については、真板・海津（2001）などを参照されたい。

アンバザ村は、砂糖産業の拠点として発展するフィジー第二の都市ラウトカの後背地に位置し、環境保全地域として、山の自然を生かした観光開発がおこなわれているコロヤニトゥ地区に存在している。コロヤニトゥ地区では、6つの村（アンバザ、ヴァカムブリ、ナヴィラワ、ナロタワ、ナンデレ、ヤロク）が観光開発に参加しており、コロヤニトゥ国立公園を周遊するトレッキングコースなどが設けられている。アンバザ村は、そのトレッキングコースの入り口に位置し、宿泊のための案内所⁵も設置されおり、本地域における環境保護活動の中心的役割を果たしているといえる。

アンバザ村へ向かう多くの観光客は、通常、ラウトカないしナンディ（ナンディ国際空港周辺地域）から、タクシーを利用して村へ向かう。アンバザ村は、ラウトカから山道を40分ほど登ったところに位置しているが、山道の途中、複数の小川を越えなければ

⁵ ラウトカ市内にある旅行代理店、あるいは、ユースホステルなどでは、アンバザ村のエコ・ツーリズムに限らず、多くの観光プログラムの斡旋を行っている。フィジーにおける、ほとんどの観光プログラム（エコ・ツーリズムを含む）は、ホテルで申込をするのがほとんどである。

ばならないため、通常のタクシーではなく、四輪駆動車を利用しなければならない⁶。

<村落内部>

山道を抜け、村に到着しタクシーを降りると、村の主立ったものや、外で賑やかに遊んでいる子供たちが、“Bula⁷”と呼びかけ握手をしてくれる。アンバザ村の人口は 100 人弱程度と、比較的小さな村である。村落内部は、村の教会を中心として、その周囲が広場となっており、更にその周囲を囲むように家々が立ち並んでいる。村内では芝が整えられており、きれいに掃除が行き届いている印象を与える（図 1 参照）。宿泊場所は、通常、村のいずれかの家族の家屋であるが、どの家族がホストとなるかは、村の側が決定しているようである。筆者は、事務局を担当している女性の家に宿泊することになり、居間からは仕切りによって隔たっている寝室が提供された。1995 年には、ニュージーランド政府からの援助で、この村から 15 分ほど山を登ったところに、12 のベッドと居間と台所が設置された一件のロッジが建てられた。村でのホームステイの代わりに、ロッジで滞在し、食糧を持参しない場合は、いくらか支払って村の中で食事を取ることも可能となっているという。



【図 1.アンバザ村】

<村の日常生活体験>

村では、ホストの家族が作ってくれた昼食を取り、村の中を散歩しつつ、声をかけてくれた村人たちとの会話を楽しみながら一時を過ごす。訪問者に支給される食事も、ココナッツや、周辺で採れた植物などを使用したもので、村人たちが通常食しているものと同じ食事である。到着後は、村人と狩りに出かけたり、村落内を散歩したり、あるいは、トレッキングに出かけたり、村において何をするかは、旅行者の自主性に任せられ

⁶ 筆者が最初にアンバザ村を訪れようとした際は、前日に大雨が降り、小川の水位が上昇していたため、村への訪問をキャンセルせざるを得なくなるアクシデントに見舞われた。

⁷ “bula”は、フィジー語（の中のバウ語）で、通常「こんにちは」など、一般的に挨拶の際に使用される表現である。アンバザ村が位置するラウトカ周辺では、日常語としてはバウ語を使用しないため、外来者向けの挨拶として、“bula”が使用されているといえる。

ており、決まったプログラムに則って行動する必要はない。夕方から夜にかけては、「セヴセヴ儀礼」に参加するために、村長の家に案内される。セヴセヴ儀礼とは、ヤンゴナ（＝カヴァ⁸）と呼ばれる飲み物を、村への訪問者と村人が互いに飲み交わすものであり、この儀礼を通過することによって、訪問者は村の一員として受け入れられることになる。セヴセヴ儀礼は、フィジーの村では非常に重要な通過儀礼となっており、村人の多くが集まり、深夜近くまで、訪問の目的などを語りながら、村人と交流することが出来る絶好の機会を提供している。

また、フィジー系フィジアン⁹の多くはキリスト教徒であり、ほとんどの村では、日曜日に村の教会で礼拝が行われている。アンバザ村への訪問者は、希望をすれば、そうした村の日常の活動にも村人と共に参加することが出来る（図2参照）。礼拝に参加す



【図2. アンバザ村教会内部】

るための正装なども、ホスト家族が支給してくれる。その他、村の子供たちが、村の周辺に生えている植物を採りに出かける際に、声をかけてくれるものがいたりするので、アンバザ村では、フィジーの村落における日常の生活を体験する機会が豊富にあるといえる。

<フィジーの「自然」を味わうトレッキング>

コロヤニトゥ国立公園を周遊するトレッキングコースには2つのルートが存在しており、訪問者の趣向に合わせて選択することが出来る。アンバザ村から徒歩で10分ほどの所に、トレッキングコースの入り口があり、目玉の一つとなっている滝を見ることが出来る。バティラム山の頂上を目指すトレッキングコースは、片道2時間ほどの山道を登り頂上まで行くというものである。途中で、ラウトカ市内を見下ろし、雄大な大自然の風景を味わうことが可能なスポットも点在しており、多くの自然愛好家たちにも人気のコースとなっている。また、アンバザ村の集落が森の中にすっぽりと包まれている

⁸ ヤンゴナは、街のマーケットなどで10ドル分程度購入し、自ら持参することが望ましいが、村の中でも購入することは可能である。また、セヴセヴ儀礼の際、または、村に滞在しているときは、腰に巻き足を隠す、「スル」と呼ばれる布を巻くことが望まれる。

⁹ その内、66.7%がメソヂスト、13.2%がカトリック、6.3%がアセンブリーズ・オブ・ゴッド教団、5.1%がSeventh-Day Adventists(SDA)となっている(1994年現在) (Walsh, 2006, p. 201)。

様子を見ることが出来、村の生活が、自然に大きく依存したものであることを強く意識させるトレッキングコースとなっている。

<村人たちの声>

村の来訪者は、1993年には10月から270名、1994年には430名、1995年には340名、1996年には410名、1997年8月までには220名ほどが訪問している。ロッジの使用料は一晚15ドル、村でのホームステイの場合は45ドルである。観光で村を開放した効果として、概算で村に年3000ドルか4000ドル、一月に300ドルか350ドルの収入があるという。その額は、一人の公務員の給料より安い、その少しの現金収入が、村を少し豊かに明るくする要因となっている（橋本, 1999）。

実際に、村のある中年男性は、「エコ・ツーリズムによる収入が、子供たちを学校に送り出すための収入源になっており、また、始めた頃は、旅行者が来ると逃げていた子供たちが、最近では笑顔で彼らを迎え、交流が盛んになった。当初は、村を開放することに対して反対していた村人たちも、こうした状況を見て、最近では賛成している」などと、エコ・ツーリズム村として村を開放したことによって、村の中で様々な良い変化が生じていることなどを、嬉しそうに筆者に語ってくれた。



【図3.アンバザ村の日常】

<今後の展望>

こうしたアンバザ村の事例は、エコ・ツーリズムが観光客とフィジーの双方にとって有益であることを物語っている。まず、訪問者の中には、南太平洋大学の学生グループなども見られることから、これまでこうした宿泊施設が少なかったフィジーにとって、フィジー在住者がグループで宿泊する格好の学習施設を提供しうる可能性がある。通常は、リゾートホテルなどに宿泊している観光客を「エコ・ツーリズム」（周辺地域の観光）への参加するよう促すことに主眼が置かれがちであるといえるが、そればかりではなく、国内の観光客を開拓する可能性も高いかもしれない。

更に、アンバザ村の事例は、「自然」を強く意識したエコ・ツーリズムとなっており、それを通して、観光客のみではなく、フィジー国民自身もフィジーの「自然」を勉強す

る絶好の機会を提供しうると考えられる。観光客が、周辺に広がる雄大な自然を価値あるものとして認識することが、フィジー国民が自らの価値を知ることを促進し、自然、あるいは「伝統文化」を見直す切掛けとなりえよう。また、フィジー人にとっては見慣れた、毎日の食事などに使用するタロイモやカッサバなどを含む植物相、マングローブ林に多く生息しているカニ、その他の動物相なども、外国人には珍しいものでありうる。いわば、外からの眼で自分たちの「文化」や「自然」を見直し、村人自身が学習し、その後、それを観光客に教えることによって、観光客が学習するという循環を生むことが可能である。その意味において、アンバザ村の事例は、村、そして訪問者双方にとって、環境教育、あるいはESDの現場となりうる可能性が高い事例である。

3.2 ナブア川エコ・アドベンチャー、フィジー文化体験プログラム

この「ナブア川エコ・アドベンチャー、フィジー文化体験」プログラムは、2001～2004年にかけて、観光に関する多くの賞を受賞しており、その意味において、国際的にもよく知られている優良プログラムの一つとされている。以下、アンバサ村の事例と同様、筆者が参加したナブア川エコ・ツーリズムの実践模様を、参加者の視点から素描する。

<ナブア川クルージング>

ナブア川は、フィジーの首都スヴァから、西へ車で40分ほどの所に位置しており、周辺の離島などへのボート乗り場が存在する交通の拠点となっている。このエコ・ツーリズムプログラムの参加者のほとんどは、近隣のリゾートホテル、あるいはユースホステルなどに宿泊しており、プログラムへの参加申込などもホテルが行っている。参加



【図4.ナブア川クルージング】

者たちは、当日の朝、ホテルからタクシーにて、ナブア川河口付近にある船着き場に集合する。船着き場は、プログラム専用の船着き場となっており、そこで救命着などを着用し、ボートの準備が完了するまで、しばらくの間、船着き場の主人、あるいは他の参加者との会話をする時間がある。その後、案内人と共にボートに乗り込み、20分ほどナブア川を上流に向かって逆上がり、しばらくクルージングを楽しむこととなる（図4参照）。途中では、案内人が気を利かせて、ボートの速度を落としてくれたりするので、

水浴びや釣りを楽しんでいる村人たちの様子や、むき出しになった岩肌、迫り来る自然を、参加者が十分に堪能出来るように配慮されており、リゾートホテルの滞在のみでは見ることの出来ないフィジーを見ることが出来る。

<村落訪問>

20分ほどナブア川を登った中流域には、プログラム用に整備された村が存在しており、中流域に到着後、参加者はボートを下り、その村を訪問することになる。この村は、エコ・ツーリズムのために作り替えられた村であり、集会所、工芸品作りのための場所、料理場、家屋、作物栽培用の土地などが、訪問者向けに配置されている。村に到着すると参加者は、このプログラムのために刷新された、村の中心にある大きな集会所に案内され、歓迎用に脚色された壮大なセヴセヴ儀礼が執り行われる。集会所には、「伝統的」衣装に身を包んだ、男女合わせて20人程の村人が出席し、参加者を迎い入れる。セヴセヴ儀礼が終了した後、村の男性の一人によって、村の歴史、系譜などについての説明が行われる。

その後、参加者は、集会所を後にし、案内人の男性によって、フィジーの伝統料理である「ロボ」を作っている場所に導かれ、案内人から伝統料理についての説明などが為される。その後、村人たちがココナッツの皮をむく様子や、村の子供達が歓迎の歌を歌う様子、タパ（ブレと呼ばれる伝統的な家屋の内装や、儀礼の際に着用する衣装に使用される布紙）を実際に作る様子などが、プログラム用に「演劇的」に実践される様子を見学する。また、村の周りに植えられている「カヴァ」などを、案内人の解説を聞きながら見学することになる。案内人は、20歳前後の村の男性が担当しており、それぞれの場所で5分ほど解説が行われる。参加者からの質問がある場合は、それに答えるという形で進行する。こうした解説は、フィジー「文化」を垣間見るといふ点においては、有益なものとなっているが、それ自体が極度にマニュアル化された解説となっており、その結果、村の個性や、日常生活を反映したものというよりは、ステレオタイプの【図5.「ロボ」の解説をする案内人】なフィジー文化の解説となっている感が強い（図5参照）。



以上の見学が終了した後、（実際に作る様子を見学した）ロボを含む、村人による手

料理が、参加者に対して振る舞われる。そして、村人達によって「メケ」と呼ばれる歌と踊りの伝統舞踊が披露される。メケには、男性が槍を持って舞うもの、女性が座って手と腰、顔の動きによって踊られるもの、また、村人と参加者が共に踊るものなど、複数の種類がある。メケが終了すると、村の女性たちが、集会所で手作りの工芸品を並べ、気に入ったものがあれば訪問者が購入することが出来る。それらが終わった後、参加者は再びボートに乗り込み、村を後にする。

<滝、バンブーラフティング>

村を出発した後、更に上流にある大きな滝壺までボートを走らせ、参加者は、滝壺での水浴びなどを楽しむ。その後、川辺に停泊している竹の筏でラフティングを体験する。これらも全て、案内役の村人が決められたコースを辿るというものである。筏でのラフティングが終了した後、再び参加者はボートに乗り込み、30分ほどかけてナブア川を下る。そして、最初の船着き場まで戻り全プログラムが終了する。こうしたナブア川の事例は、プログラム参加者が、フィジーに対して持つ「自然（環境）」、「伝統文化」のイメージを、「自然体験」と村人との交流を組み合わせることによって、いわば「自然」と「伝統文化」が共存するフィジー、というイメージを効果的（演劇的）に喚起させることの出来る内容となっていると考えられる。短時間に様々な要素が詰め込まれた充実したプログラムとなっているといえるが、その分、全ての要素が高度にマニュアル化され、「見せ物」として脚色化されている印象を強く与える。その結果、「アトラクション」としては充実していると解釈しうる反面、参加者は、案内人に従って、そぞろ歩きするだけという側面は否めない。

3.3 ナララ村の事例

最後に、ナララ村のエコ・ツーリズム実践を紹介する。ナララ村は、ビチレヴ島東北部の拠点であるラキラキから、内陸部へ車で約20分の所に位置している。この村では、2年ほど前からエコ・ツーリズムプログラムを行っている。しかし、開発のために大規模な資本が投入された、アンバサ村やナブア川の事例とは異なり、ナララ村の実践は非常に小さな取り組みである。

ナララ村が、エコ・ツーリズムに取り組んだ切掛けは、ラキラキにある観光者向けのホテルで、ナララ村出身の男性が働いており、彼がホテルに来る観光者向けに村を開い

てはどうかと、村に話をもちかけたのが始まりであるという。その後、村の中心にある広場を、簡単な屋根付きの集いの場として整備したが、それ以外は、日常的に村で行われてきたもの、既に村の中に存在しているものを「資源」として利用したものである。大きなエコ・ツーリズム開発は、全く行われていない。また、プログラムの改善点なども、村人たちが独自で思考しておこなっており、いわば「草の根」的要素が高い事例であるといえる。今回の調査では、このプログラムを通した詳細なお金の動きを明確化することは出来なかったのだが、村に入る収入は、村の中の数人の長老格に渡ることになっているという。それらは、今後、村の集会場や訪問者が水着を着用するための小屋を建設するための費用として貯蓄されている。

筆者自身、ナララ村がエコ・ツーリズムに取り組んでいることを知ったのは、他の調査に関連して村を訪れた後のことであった。筆者の滞在中に、偶然、団体の旅行者が村にやってきたことがあったが、ここで紹介する事例は、その際のものである。従って、訪問者の目には、筆者は「迎える側」、つまり、村落の一員として映っていたと考えられる。ここでは、そうした特異な立ち位置から見たエコ・ツーリズム事例として、その詳細（舞台裏）を記述する。

<訪問者の迎え入れ準備>

前日の夕方にホテルから村の方に、翌日の昼過ぎに、アメリカ人のダイバー（12人）がプログラムを通してナララ村を訪問するという連絡があり、当日は、朝から村の女性たちが、訪問者を歓迎する際に首にかける草花の首飾りを作っている（図6参照）。その周りでは、子供たちがレモンを搾って、訪問者に振る舞うためのレモンジュースを作っている。首飾りに使用する草花、レモンジュースに使用するレモンなどは、全て村の中に生えているもので作られる。また、訪問者を迎え入れる場所となる広場では、男性たちが芝を刈っている。子供たちは、屋根付きの広場の柱を、草花で飾り付けしている。訪問者の到来時刻が迫るにつれて、村の中が少しずつ慌ただしくなってくる。女性たちは、普段着から、街や教会へ行く際に着用する服に着替えている。また、訪問者を出迎える際にギターを演奏する男性も、ギターを持参し訪問者を待っている。メケの踊りを行うことになっている若い女性と男性は、それぞれの衣装に着替え始めている。また、歓迎の広場では、セヴセヴ儀礼の際に、カヴァを入れておく「タノア」と呼ばれる桶なども用意され、儀礼の準備が始められる。歓迎の場所には、多くの村人たちが「スル」

を巻いて現れ、数人の男たちはギターを抱えて歌を歌っている。タノアの横には、メケの踊りの際に使用される「ラリ」と呼ばれる小さな太鼓なども準備されている。

このように、ナララ村でのエコ・ツーリズムプログラムに際して行われる村側の準備作業は、朝の9時頃から約2-3時間程度で終了する、簡単なものであり、村人たちの毎日の畑での作業などにも支障なく行える。そして何より、これらの作業は、村人たちが日常の生活において行っていることであり、毎日の生活スタイルの大きな変化を要求するものにはなっていない。



【図6.首飾りを作る女性たち】

<訪問者到着>

訪問者は、ラキラキにあるホテルから大型タクシー2台で村にやって来た。訪問者が車から降りると、村人たちが“Ni sa bula”という曲をギターで弾きながら歌い、訪問者を総出で出迎える。また、その内の数人の女性は、訪問者の首に首飾りをかけている(図7参照)。その後、歓迎の広場に訪問者が迎え入れられ、タノアを境にして、客と村人が向かい合って座る。村の女性の一人が、歓迎のことばを述べたのち、セヴセヴ儀礼が行われる。訪問者全員と幾人かの村人が一通りカヴァを飲み交わした後、村、セヴセヴ儀礼、またはカヴァについての簡単な説明が村人によって行われる。

セヴセヴ儀礼が終了した後、メケが披露される。ナララ村でのメケは、ナブア川のものとは異なり、若い女性と男性が共に踊るものである。その他の村人たちは、その周辺に座ってメケの歌を歌う。3曲ほど演じられ、最後に訪問者も村人たちと共に踊りに参加し、メケが終了する。こうしたメケの踊りも、村の日常生活において普段から行われているものであり、エコ・ツーリズムのために特別に作られたものではない。



【図7.訪問者を歓迎する村人】

その後、カヴァ、あるいは、レモンジュースなどが振る舞われた後、訪問者は村人と共に、近くの滝壺まで歩いて行き、約1時間水浴びを楽しむ。訪問者が、水浴びを楽しんでいる間、村では女性たちが手作りで作った工芸品などを広げて準備し、訪問者の帰りを待つ。帰ってきた訪問者は、パイパイやパ

ンなど村人たちが作った差し入れを食べながら、お土産を買い始める。また、お土産に興味がない訪問客は、その間、村人たちとの会話を楽しみながら、カヴァの飲み合いを行っているものなどもあり、訪問者がプログラムを楽しんでいる事が伺える光景が随所に見られた。そのような、村人と訪問者との交流の時間が過ぎ、17 時頃、村人の代表が感謝と別れの辞を述べ、別れの歌がうたわれる。そして、村人たちが訪問者と握手し、タクシーに乗り込むのを見送った後、一連のプログラムは終了する。

<プログラム終了後>

訪問者が村を後にしたのち、ほとんどの村人たちは、訪問者を迎えた広場に残り、残ったカヴァや食べ物を口にしながら、互いに会話を楽しむ時間へと変容する。村落内部では、日常的にカヴァの飲み会などが行われており、それが村人同士のコミュニケーションを取り持つ機会を提供しているといえる。しかし、同一の村落に住んでいても、多くの村人が一つの場所に集まることは、日常的にはあまり見られない。そうしたことから、こうしたエコ・ツーリズムを通して、村人全員で一つのことを行うこと、またその終了後に、多くの村人が一同に会し、語らいの時間を持つことは、村落内部の結束性を強める非常に良い機会を提供していると考えられる。

4. 考察

以上、前節においては、筆者が実際に参加したフィジーにおけるエコ・ツーリズム実践の3つの事例を紹介した。本節においては、これら3つの事例を比較対照し、「環境教育」という視点から、その特徴、課題を検討したい。

4.1 日常性（あるいは、演劇性）

3つの事例を比較して、参加者が、村の「日常生活」を最も良く垣間見ることが出来るのは、アンバサ村の事例であると考えられる。前節においても触れたが、アンバサ村を訪問する参加者は、村によって決められたプログラムに則って行動する必要はない。村人がその場で作ってくれる食事、教会での礼拝や、植物の採集などといった村における日常の活動への参加、そして、実際の家族との会話などを通して、村の日常生活の在り方を垣間見る機会が豊富にある。それによって、参加者が実際に村落の一員として迎

えられている感覚を与えているといえる。

一方、ナブア川とナララ村でのプログラム、とりわけ、ナブア川のプログラムでは、ホテルでタクシーに乗って、村から帰ってくるまで、参加者は、決められたプログラム進行に従って行動することが要求される。実際に、村人たちと会話をする時間はほとんどない。また、村人側も前もって決められた、完成したプログラムを、いかに効率よく運営できるか、またその完成度をいかに上げるか、ということに終始している様子が散見され、その結果、プログラムにおいて提示されるフィジーの村の生活は、日常の村の生活とは大きくかけ離れたものになっているといえる。また、参加者を迎え入れるための村も、エコ・ツーリズムのために、大規模に作り替えられている。その結果、参加者にとっては、村人たちが「伝統的生活」を演じている様にさえ映る可能性もあろう。こうしたナブア川のプログラムは、前もって緻密に計画されたものであり、演劇性が非常に高いプログラムとなっていることが特徴であり、演劇性（アトラクション性）という意味においては、高く評価しうるものであるが、その反面、参加者に対して、極度に美化されたフィジー像を植え付ける可能性が高い。川でのクルージング、滝壺での水浴びやラフティング、村への訪問という、短い時間に、様々な要素が凝縮された「アトラクション」としてのエコ・ツーリズムプログラムであるといえよう。

一方、ナララ村のプログラムも、ナブア川と同様に、プログラムが決められており、参加者はそれに従って行動することを要求される。しかし、ナブア川の事例と異なり、村の中で自由に過ごす時間が設けられており、参加者と村人が交流する光景が散見された。

4.2 「自然」

次に、「自然」という側面から比較したい。筆者は体験する機会に恵まれなかったが、アンバザ村では、「エコ・ガイド」として村人が参加者と共にトレッキングコースなどを回り、植物について、またそれをどのように利用しているかなどについて解説してくれるオプションも存在している。また、村人たちと過ごす時間が豊富にあり、彼らと村の周辺を散歩するだけでも、自然についての豊富な知識に出会うことが出来る。また、コロヤニトゥ国立公園として指定された地域であるため、参加者の「自然」に対する意識も高く、「エコ・ツーリズム」を推進するには、非常に適した場所となっている。

また、ナブア川の事例も、終始、「自然」を意識させるプログラムとなっている。と

りわけ、村までの道のりが川のクルージングであること、筏でのラフティング、滝壺での水浴びなど、フィジーにおける様々な自然の表情に触れることが出来るようになっていく。しかし、自然ガイドなどによる解説は無く、「自然」について学ぶ機会を提供するというよりは、結果的に、いわば遊園地（アトラクション）として自然を満喫するという形になっている。

ナララ村の事例は、「自然」より、リゾートホテルに滞在する観光客が、フィジーの村の様子に触れることができるというところに主眼が置かれている。しかし、アンバサ村やナブア川の事例と異なり、村で行われている生活、歴史、植物等に関する解説は全くなく、「知識」をうるという側面においては、乏しいプログラムとなっている可能性がある。しかし、アンバサ村と同様、プログラム自体が日常生活の延長線上にあるため、フィジーでの村の生活が「自然」に大きく依存したものであり、それ無くしては成り立たないことを、参加者が体験的に学ぶことができるようになっていくといえる。

4.3 環境教育、ESD という視座

アンバサ村、ナブア川、ナララ村の事例から分かる通り、現在フィジーにおいて行われているエコ・ツーリズムプログラムは、概して、「自然」と「(伝統)文化」の両要素を組み合わせ、両者が共存するフィジーのイメージを効果的に喚起することに主眼が据えられていると考えられる。また、案内人を担当する村人などによって、自然について、あるいは、村の文化、歴史についての解説を聞く機会も豊富に存在しており、村人たちの目線から、彼らの「自然」、あるいは「文化」がどのように生きられているかを学ぶ、絶好の機会となりえよう。従って、こうしたエコ・ツーリズムが提供する、重要な視点は、「ESD」が提唱するように、「自然（環境）」とは、それ自体として存在するものではなく、毎日の生活の中で生きられている「文化」である、ということであるといえよう。

筆者が、ナララ村のある男性と会話をしていたとき、彼は、滝壺がある場所、洗濯したり、水浴びをしたりするのに適している川の特定の場所、植物が豊富にある森の中の特定の場所など、村人たちが日常生活の中で多用する、ほとんど全ての「場所」に名前が付けられていることを教えてくれた。こうした事例は、「自然（環境）」が、まさに「場所」であること、言い換えれば、日常の生活を抜きにしては語り得ない「文化」として存在していることを物語っている。エコ・ツーリズムに求められているものは、珍しい

自然や動物についての詳細な知識を、教科書を読むかのように参加者に提供するということよりはむしろ、「自然」が日常の生活と共に生きられている「文化」である、という理解を促すことにあると筆者は考える。そうした、コンテキスト化された「文化」としての自然は、日常化したものであるが故に、自然解説などの試みからのみではなく、村人たちとの会話の時間や、共に日々の活動に参加する時間が豊富にある（いわば「演劇性」の低い）、アンバサ村のツーリズム事例などにおいて、効果的に学ばれうる可能性が比較的高いと考えられよう。

5. 終わりに

本稿で紹介したプログラムは、現在「エコ・ツーリズム」として範疇化されているものであり、現在フィジーにおいて展開しているエコ・ツーリズム活動のほとんどは、同種のものとして位置付けることが可能である。また、前節で論じた通り、「環境教育」、あるいは「ESD」という視座から見ても、エコ・ツーリズムへの参加は、参加者、あるいは、主催者である村人にとっても、効果的な側面を持っているといえる。

しかし、こうした活動を「持続可能」な観光形態として短絡的に結びつけることが出来ないことも明らかである。事実、エコ・ツーリズムプログラムに参加する多くの観光客は、近隣のリゾート地に宿泊しており、そうした大型のホテルなどの介在を抜きに、観光客と村が直接的に繋がることは難しい。言い換えれば、「マス・ツーリズム」の遺産無くして、「エコ・ツーリズム」という「産業形態」自体が存在しえないという問題がある。つまり、現状のエコ・ツーリズムは、マス・ツーリズムの下位分野、「一流行」としてのみ展開しうるものであり、観光産業における根本的な変化を促す活動となっていないという見方も可能である。

批判的視座に立てば、エコ・ツーリズムの奨励によって、それが対峙しようとした「マス・ツーリズム」を、むしろ助長してしまう方向に向かっていることすら否定するのが難しい状況があるといえるかも知れない。「自然」が、個々の社会・文化・歴史的コンテキストに根ざしたものでしかあり得ないのと同様に、我々が推進しようとする「エコ・ツーリズム」という考え方自体が、我々自身の特殊な文化的コンテキストから派生したものであることを、今一度自省的に考察する必要があるのかも知れない。そして、我々が行う活動自体が、何を意味し、どのような影響を持ちうるのかを批判的に考察する視座を持ちつつ、どのようにすれば「持続可能」な観光形態に近づくことが出来るの

かを、様々な事例を比較対照しながら模索していかなければならない。

以上、本稿では、3つの事例を基に、フィジーにおける現在のエコ・ツーリズム実践について、「環境教育」、ないし「ESD」の視座から論じ、そうした取り組みが持つ「学び」の要素について考察した。今後は、マングローブ植林など、環境保護活動とリンクしたエコ・ツーリズム実践事例を考察し、更に包括的な調査を実施していきたい。

参考文献

- 橋本和也 (1999). 『観光人類学の戦略：文化の売り方・売られ方』 世界思想社.
- 石森秀三 (1996). 「観光革命と 20 世紀」『観光の 20 世紀』 ドメス出版.
- Islands Business* (1994). March.
- 真板昭夫・海津ゆりえ (2001). 「フィジー諸島におけるエコツーリズム開発とその実験的試み」『国立民族学博物館調査報告書 23：エコツーリズムの総合的研究』 pp. 139-162. 国立民族学博物館.
- Ministry of Tourism (2003). *2002 Fiji international visitor survey summary report*. Suva: Ministry of Tourism and Stollznow Research.
- プランチ, ニーク. (2003). 「エコ・ツーリズムの考察：1980年代からのフィジーにおける観光開発」『観光開発と文化：南からの問いかけ』 pp. 207-241. 世界思想社.
- Parliamentary Paper No. 20 (1999). *A Strategic Plan for the New Century: Policies and Strategies for the Sustainable Development of Fiji*. Suva: Government of Fiji.
- Siegel, J. (1987). *Language contact in a plantation environment: A sociolinguistic history of Fiji*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Varley, R. C. G. (1978). *Tourism in Fiji: Economic and social problems*. Cardiff: University of Wales Press.
- Walsh, C. (2006). *Fiji: An encyclopaedic atlas*. Suva: The University of the South Pacific.